

西鶴の表現

——「うごく」と見えて」小考——

平 林 香 織

貞享四年（一六八七）刊行の井原西鶴の浮世草子『懷硯』巻一の一「仁王門の綱」は、洪水時における京の巷間での小事件を扱う。白川の氾濫によって頂妙寺南門の仁王像まで水に流されてしまった。その仁王像の片手を拾い上げた生真面目な男が、それを「鬼の手」と思い込み、家宝として秘匿する。そのことを聞きつけた人々が、「末代の語り句なればみせて給はれ」と男に迫る。ついに、ある夜、公開の運びとなり、鬼のかいなを取めた櫃を人々は取り囲み中を覗き込む。その途端、「ふしぎや此かいな、誰が目にもうごとくと見えて」、居合わせた人々は卒倒してしまふ。しかし、夜が明けてよくよく見ると、それは木製の仁王像の片腕であった、という話である。

仁王像の腕を拾った男が、律義者で信頼の篤い人物であり、その彼が召し連れた男にわざわざ口止めしたために、話がかえってもつともらしく伝播する。また、鬼の腕見学に先立ち、人々は家人と別れの杯をかわすやら、鎖帷子を着込むやらで、各人の心には、所謂「恐いもの見たさ」の緊張感と期待感が募っている。それが群集心理となつて興奮の度合いが頂点に達したところで、鬼の腕を見ることになり、その挙げ句が「誰が目にもうごとくと見え」たということなのである。「うごいた」のではない。動いたように見えたのである。あるいは、櫃の周囲にひしめく人垣の微妙なバランスの崩れから物理的に櫃が動き、その結果、がたと腕がずれ動いたにすぎなかったのだから。それが、災害という非常時

における興奮状態も冷めぬ折、強すぎる期待感によって、生きもののようにびくりと動いたと錯覚されてしまったのである。その場は混乱し、事実を確認できるはずもなく夜明けを迎える。量的にはわずかな記述であるが、計算され尽くした表現によって、災害時のデマ発生のきっかけ、群れることで適正な判断力を失う人し心、いとも簡単にパニック状態に陥る様相等々、現代社会に通じる様々な問題を喚起して止まない。

『懷硯』の前年に刊行された『西鶴諸国ばなし』の巻五の四「身を捨て油壺」も、混乱した心理状態のもとでの人々の見誤りを描いている。

河内国に一人の不幸な老婆が住んでいた。彼女は十八歳になるまでに十一回の結婚をし、

十一人の夫を「あわ雪の消るごとく」次々と失つてからというものの、八十八歳になるまで後家を通す。立て続けに夫に先立たれた女ということで人々に恐れられ、口もきいてもらえないまま、「見るもおそろしげ」に老いさらばえてしまう。木綿糸を紡いで生計を立てているのだが、灯火の油にも事欠き、止むなく神社の灯明の油を夜な夜な盗んでいた。夜毎灯明が消えるのを不審に思つた人々が、「いかなる犬、けだもののしはざぞかし」と正体を見とどけるべく、「弓、長刀をひらめかし」寝ずの番をすることになる。折しも夜半の鐘の鳴る時、「おそろしげなる山姥」が出現する。人々は氣を失ひ混乱する中で、弓の上手が老婆の首に矢を射る。すると首は「そのまま火を吹出し、天にあが」つていく。夜が明けてよくよく見てみると、山姥ではなく例の老後家であつた。死体を見て「山里の名立姥」であると認められたからには、火を吹いて天に飛び上がったはずの首は、ちゃんと体に付いていたようである。

また、『懷硯』に二ヵ月先立つて刊行された『本朝二十不孝』の巻三の三「心をのまる蛇の形」は、次のような話である。滝壺の底で漆の塊を底で発見して財をなした男が、

それを独り占めするために、彫り物の竜を水底に沈めて他人を遠ざけた。その竜は、「さながら生きて動くごとく、日数ふりて是を見るに、口を動かし、尾を延べ、剣を縮め」、竜を沈めた本人にさえ、恐ろしく見えた。ところが、男は、父親にそこまでして漆を独占しなくてもと意見されて、かえつて反発し、十四になる自分の息子に漆採りを指導しようとして滝壺に入る。すると「最前の竜に精有て、武助（息子）を喰て振とみえ」、親子共々波間に消えてしまう。二日後に死体があがるが自業自得とばかり人々は同情もしなかつた。死体があがつたことは、息子が竜に吞まれたのではないことを示唆する。

男が竜に性根が入つて息子を吞み込んだと見誤るに至る経緯は実に周到に描かれている。まず、細工とわかつていても男には竜が恐ろしく見えたという記述は、漆を独占することへの罪悪感の表れにはかならない。そしてその罪悪感、父親の注意を受けて追い詰められ、我が子が竜に吞み込まれたと思ひ込む下地となる。岩組鋭い滝壺はそれでもとも危険極まる場所であるが、その底に十四の息子を漆を取りに潜らせるといふ早計な行為には、悪事を父親に糾弾された男の行き場のない思

いも看取される。男の様々な心理の相乗作用によつて息子は竜に吞まれたように見えてしまった。泳ぎの拙い息子と曲がりくねつた形状の竜とが、逆巻く波間に見え隠れするという視界の悪さも影響した。竜への恐怖心と息子が吞まれたと思ひ込んだ焦りから、男はバニック状態に陥り、水練の上手であつた彼までも溺死してしまう。「心をのまる蛇の形」という表題は極めて暗示的である。

いずれの話においても、当事者にとっては、確かに腕が動き、首が火を吹いて飛び上がり、また、竜に吞まれたとしか思えないような状況が設定されている。一方で、客観的には、明らかに異常な心理状態下での幻影であるとも読み取れる書きぶりは、見事としかいえない。読者は、当事者の側に立つてどきまぎもするだろうし、第三者の立場に立つて当事者を笑うこともできる。

それにしても、動かないはずのものを動かしてしまふ人の心こそ、何とも恐ろしいものと思えてくる。